

弾投下に伴う木造家屋の延焼が問題となっており、空襲への備えや対応の多くが、火災への準備や避難、消火活動になっている。人々がこのポスターを家に貼り生活していたことを考えると、不安や恐怖の気持ちが推察される。

6月17日の鹿児島市への大規模空襲について、先述の「玉里出張所往復綴」では、玉里邸から東京の本邸に以下の報告がなされている。

去ル十七日午後十一時、敵機数十機突如鹿児島市上空ニ来襲、市内一圓二焼夷弾投下、各所ニ火災発生ノ後、空襲警報発令アリ、玉里御邸内ニ大型焼夷弾十数個落下、御本家表奥御座ニ数個、御庭附近二十個、内不発三個落下、為ニ事務所奥ニ火災ヲ生シ、消火スル間モナク身ヲ以テ屋外ニ脱出ヲ得タル次第ニテ、御本家一時ニ大火災トナリ御本家一棟全焼致シ、誠ニ以テ恐縮申訳無之、御留守御預リ責任ヲ全シ得ス、実ニ残念ノ至リニ御座候、茲ニ謹而御詫申上候、(中略)

附近被害ハ、縣立工業學校二棟焼失セシノミニシテ、市内大底ハ被害ヲ蒙リ(以下略)

夜間の突然の空襲により、鹿児島市街地が火災に見舞われ大きな被害を受けたことが読み取れる。

下の写真は、令和2年5月に鹿児島市吉野町のネギ畑で見つかった機銃弾である。当館には、他に薩摩川内市向田町の民家に打ち込まれた機銃弾も収蔵しており、2つの銃弾は大きさや形が似ている。鹿児島市への空襲の際に打ち込まれたものと推測される。銃弾が発見された当時の新聞に、吉野町の寄贈者は「戦争の痛みは忘れてはならない、繰り返してはならないと銃弾が伝えている気がする」と語っている。また、同年には下田町の七窪水源地近くで戦後見つかった鉄塊が、焼夷弾の弾尾バラスト(重り)であったことも分かっている。

戦後、復興事業が進められるなか、空襲を経験した人々にとってそれは忘れられない記憶であり、市内各地に慰霊碑が建てられた。調査で、「太平洋戦争民間犠牲者慰霊碑」(名山町みなど大通り公園、昭和49(1974)年6月設置(以下同じ))、鹿児島駅慰霊碑(浜町JR鹿児島駅構内、昭和58(1983)年12月)、鹿児島市立女子興業学校の碑(中央町共研公園内、平成16(2004)年6月)、戦災鎮魂慰霊碑(堀江町山形屋パーキング前、平成16年6月)を訪れた。これらに刻まれた碑文から伝わることは、「戦争はかつて身近な生活につながっていたということ」「戦争の記憶を風化させないこと」である。戦争が生活につながっていたことを認識することは、平和の重要性を再認識し、戦争の抑止や平和の創出にもつながる。



機銃弾

<参考文献>

- 鹿児島県編『鹿児島県史 第五巻』1967 鹿児島県
- 鹿児島市史編さん委員会『鹿児島市史Ⅱ』1970 鹿児島市
- 鹿児島市戦災復興史編集委員会編『鹿児島市戦災復興誌』1982 鹿児島市役所
- 新福大健「史料に見る玉里島津家の戦中・戦後」(『黎明館調査研究報告第36集』2024) 1～8頁

鹿児島市への空襲について

学芸専門員 坂口 洋幸

今年(令和5(2023)年)は戦後80年にあたる。鹿児島県内では、令和5(2023)年に瀬戸内町に所在する「奄美大島要塞跡」が国指定の史跡となったり、出水市や鹿屋市では戦争遺跡を保存し活用する取組がなされたりしている。本稿は、昭和20(1945)年に起きた鹿児島市への空襲に焦点をあて、記録や戦時下の人々の生活について探してみたい。

昭和20年3月10日の東京大空襲をはじめ、昭和19年の後半から日本各地は本格的な空襲を受けるようになった。鹿児島市は3月17日から10回以上にわたり空襲を受けた。特に6月17日に行われた鹿児島市への大規模空襲は、日本の中小都市市街地に対する大規模焼夷弾攻撃の最初の目標になった。米軍機百数十機の大編隊が鹿児島市に対して焼夷弾を投下し、その結果、死者2316人、負傷者3500人の被害を受けた。鹿児島市が爆撃された背景について、“Mission Reports of the 21st Bomber Commands, 1945”(国立国会図書館・複製所蔵)には次の記述がある。

Kagoshima is important as a shipping center and is the major port and city southern Kyushu. Agricultural produce as well as personnel are shipped to other parts of the Empire. An important rail terminus, Kagoshima also has large freight yards, warehouses, workshops, and oil storage. The city is the site of a gas plant and a silk mill and it has 4 power plants connected with the Kyushu Grid.

鹿児島の海運や鉄道輸送の立地の重要性や、市内の貨物倉庫、工場、発電所などが爆撃目標とされたことが読み取れる。

昭和20年になると、県本土への爆撃が行われるようになる。玉里島津家資料の「玉里出張所往復綴」には玉里邸と東京の本邸と連絡記録が綴られている。4月に以下の記述が見られる。

去ル八日午前十時三十分頃、何ノ警報無ク突如市内雲上ニ敵機数十機来襲、最初、田上方面ニ爆弾投下、次に鴨池方面ニ投下、続イテ平ノ町西千石町加治屋町ニ爆弾焼夷弾数十個ヲ投下ノ上脱去シ、平ノ町、西千石町ニ火災ヲ相生シ申候(以下略)

事前の警戒警報や空襲警報が発令されていないことから、大都市のような防空網や情報の伝達手段が整備されていなかったことが推測される。

空襲に備えて各家庭には、「空襲時に於ける家庭の心得」という縦40cm・横55cmの新聞紙サイズの印刷物が、内務省・鹿児島県から配布されている。この印刷物には、空襲への備えや、空襲警報発令時の行動、空襲を受けた時の対応などが書かれている。「空襲に対する心得」の中で、「我が国の都市は木造家屋の集団であるから、先づ防火に全力を注ぎ、絶対に延焼せしめざるの決意をもたねばならぬ」とあることから、焼夷

ることが確認され、今後の国の優遇措置や支援に繋がっていくものと考えております。

また、昨年度から、展示スペースの照明のLED化や各種サインのリニューアルなどを進め、厳しい環境の中にありつつも、施設の充実、多様化に積極的に取り組んでおります。そうした中、先日、常設展示入館者300万人を達成しました。開館42年目にしての成果ですが、該当者はクルーズツアーでみえられたアメリカ在住の方。これも最近のインバウンドの盛り上がりを象徴したものと言えますが、今後も、益々本県の文化と観光の結びつきが深まり、入館者の裾野が広がっていくことを期待したいと思います。

当館では、常設展示に加え、時宜を捉えたテーマを設定し、18万点を超える収蔵資料や外部からの優品の中からそれに沿った素材を厳選して、鹿児島の歴史・文化の一端を臨場感をもって体感していただけるよう日々努力しております。

これからも、時代の求める多様なニーズを敏感に捉えつつ、独自性溢れる鹿児島の歴史の普遍的な価値を後世に受け継いでいく唯一無二の役割をしっかりと自覚しながら、様々な人々に強く訴求する歴史と美術の発信、展示に取り組んでまいります。そして鹿児島におけるよきフォーラムの場であり続けたいと思います。

どうぞ、県内外の皆様にご来館いただき、それぞれの楽しみ方を見つけていただければ幸いです。心よりお待ちしております。



JAPAN
MUSEUM
登録博物館

登録年月日 令和7年3月31日



館長あいさつ

館長 谷口 浩一

黎明館の手掛けるプロジェクトの一つに「県史料編纂」があります。開始以来、今年で57年目、既に110冊を超える県史料を刊行しています。本県に残された膨大な数の歴史上の記録や日記、手紙などを体系的に整理して書籍化したものであり、全国でも希少な取組と言えます。

私も、時々、館長室に並んだ史料のうちの一冊を開いてみます。漢文調で返り点がなく、丁寧語もふんだんにまぶされた文章は、なかなか読みにくいのですが、いずれ慣れてくるだろうと「かめの歩み」の読みを只管続けます。そのうちに、かなりモザイクのかかった理解ではありながらも、数百年前の史実の手触りと当時の人々の息づかいを生々しく感じ取ることができる、そんな実感を暫し持てる気がします。これも時々立ち寄る歴史の散歩道の一つです。

当館は、この3月に令和6年4月施行の改正博物館法に基づく登録博物館として登録されました。特段の外形的変化を伴うものではありませんが、改めて法に即した博物館であ

黎明館が博物館法に基づく「登録博物館」に登録されました。

鹿児島県歴史資料センター黎明館(現鹿児島県歴史・美術センター黎明館)の建設は、明治百年(昭和43年)の記念事業として計画され、「郷土の歴史・文化遺産に対する県民の理解と認識を深め、その文化活動及び学術研究に寄与するための施設」として、昭和58(1983)年に開館し、県内外の多くの方々にご利用いただいています。

開館後も、収蔵資料の増加や展示技術の進歩、観覧者のニーズの多様化などから、「わかりやすく、楽しく、親しめる」展示を目標に、平成8(1996)年10月に、常設展示を全面リニューアルしました。また、明治維新150年を契機として、案内表示・展示解説の多言語(英・中(簡体字・繁体字)・韓)化や、2階部門別展示(歴史)のリニューアルをおこない、令和元(2019)年7月に完了しました。また、令和2年4月、当館では、多くの美術・工芸品を収蔵している現状を踏まえ、館の持つ機能や性格をより明確にするため、館の名称を「鹿児島県歴史・美術センター黎明館」と改称しました。

当館は、考古・歴史、民俗、美術・工芸の総合博物館として、来館される皆様に、かごしまの歴史と文化の深み、特色を知っていただき、かごしまについて再発見する場としてご利用いただければと念じております。

令和7年度黎明館主催展覧会スケジュール

4	5	6	7	8	9	10	11	12	令和8年 1	2	3	4
令和6年度企画展④		令和7年度企画展①			令和7年度企画展②			令和7年度企画展③		令和7年度企画展④		
総合 新収蔵品展 3月11日㊦～6月1日㊦		民俗 装いの民俗 6月12日㊦～8月31日㊦			考古 古代南九州における仏教の広がり 9月11日㊦～11月30日㊦			美術・工芸 鮫島白鶴の人と書と 12月11日㊦～3月1日㊦		歴史 中世武士の戦いと生活 3月12日㊦～5月31日㊦		
		令和7年度企画特別展 歴史 島津家と伊達家 ～時代の変革に立ち向かった南と北の大大名～ 9月26日㊦～11月3日㊦										